# あなたもふるさと学芸員
## 「神埼塾」の講演から④

# 文献資料から読み解く 邪馬台国の時代

講演者　元第一経済大学教授　田中　正日子 氏

ことし3月に千代田町の川向こう久留米市城島町で久保遺跡展が開かれました。この遺跡は今から2100年ほど前の弥生時代前期末から中期前半にかけての、筑後川東岸の遺跡で、出土遺物は朝鮮半島との緊密な交流をうかがわせるものでした。吉野ヶ里遺跡に墳丘墓ができたころのことです。

### 有明海も一つの交流基地

そして朝鮮半島では、漢の武帝が紀元前108年に衛氏朝鮮を滅ぼし、楽浪郡（平壌付近）ほか3郡を置いて直接支配をしていたころです。日本と中国・朝鮮との往来はもっと盛んになり、久保遺跡のように渡来人が筑後川沿いの湿地を拓いて農耕したり、逆に日本人が鉄資材や種々の技術を求めて半島に渡ったり、住みついたりしていたのです。対馬海流と有明海の大きな干満差を利用して有明海と、朝鮮半島の間に舟を出した海人がいたと思います。

そこで前漢王朝の歴史を書いた『漢書』をみると、倭人は「分かれて百余国と為るも」、年ごとに楽浪の海を渡り、貢物をもってきたとみえています。

ところで古代の中国には、易姓革命という政治思想がありました。人民を治める君主は天命を受けた「天子」で、もし一族に不徳の者が出たら、天命は別の有徳者に新王朝を開かせるという考えです。ところが中国で最初の統一国家を築いた秦王朝では、始皇帝がみずから「皇帝」の称号を創始しました。そして秦を滅ぼした漢王の劉邦は、前漢の皇帝に推戴した同格の「王」と、新皇帝に服属した周辺諸国の蛮夷（ばんい）の首長にも、天子の威徳が及んだとみて「王」号を与え始めたのです。

5世紀に完成した『後漢書』は、西暦57年に「倭国の極南界」にある奴国が貢物を奉げて、光武帝から印綬を賜ったと書いてます。志賀島出土の「漢倭奴国王」の金印がそれです。しかし、後漢時代（25～220年）から2世紀ほども遅れて完成した『後漢書』が、奴国を遙か遠い「倭国の極南界」としたのは、天子の善政の波及を誇示する作文だと思います。というのも、遠くのクニの王からの朝貢があるほど、天子の仁徳を高めることにつながるからです。

邪馬台国のことは、魏・呉・蜀3国時代、西暦220年から280年の間のことですが、その時代の史書『三国志』のなかの「魏志」30巻にある東夷伝・倭人条に書かれています。これが通称の「魏志倭人伝」です。蜀国の朝官だった著者の陳寿は、265年に魏の権臣司馬炎（武帝）が建国した晋王朝に仕えて、魏王朝を正統視する立場で執筆しています。

東夷伝には、扶余条の前に次のような序文があります。

東北辺境の支配地では東の大海（日本海）に臨む地に住む長老から、「日の出る所の近くに」顔付きの異なる人がいると聞いた。そこで諸国を観察して回り、その掟や習俗などを採訪録することになった。それらの国は夷狄（いてき）だけれども、祭祀の儀礼のかたちを伝えている。もし中国が礼を失ったときは、四方の異民族間にその礼を求めることも実際にあるだろう。そのため国ごとに異なる点を詳記して、史書に欠けたところを補う、というのです。

3世紀の東アジア地図（吉田晶著「卑弥呼の時代」新日本新書を参考に作図）

# 邪馬台国は 対馬海流の北流地域

百余国に分かれた倭人が、前1世紀ごろに貢物を持ってきていたと記したのは『漢書』でした。ところがこれには、重要な前文があると松本清張氏が指摘されています。人の「道」がすたれたと嘆いた春秋時代の孔子は、「東夷の天性は従順」だから、渡海してその未開民族の地に住みたいと願ったという記述です。

遊牧系の未開民族などの侵攻が絶えない中国の為政者たちには、貢物を持って天子に謁見（えっけん）を求める類の東夷のクニは、一種の理想郷だったと思われます。陳寿が同じ視点で「倭人伝」を書いたことを前提に、邪馬台国時代を考えたいと思います。

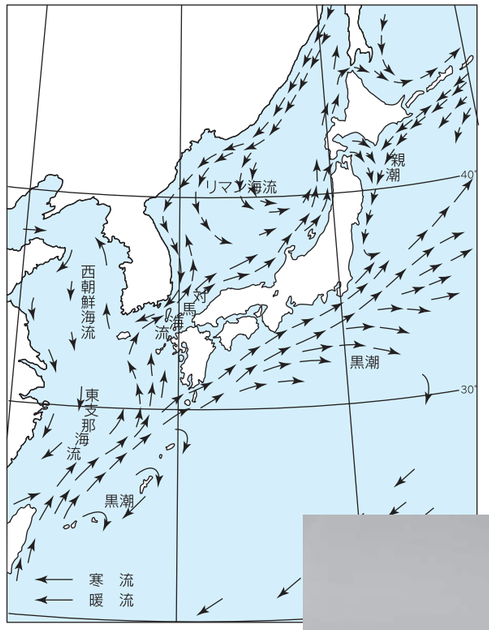
女王国・倭国の卑弥呼は29ヵ国を統治し、都を邪馬台国に定めていました。「魏志倭人伝」にソウル付近の帯方郡から邪馬台国までの距離は1万2千余里で、その支配領域が尽きると、南に女王に従属しない男王の狗奴国（ぐなこく）があるとしています。ところがその位置は、今の中国福建省の会稽（かいけい）、東冶（とうや）の東だというと、倭は東シナ海に浮かぶ群島だと認識されていたのでしょうか。

### 海流を推進力に舟で往来

魏は帯方郡から2度使節を派遣しましたが、いずれも伊都国（いとこく）まできて、その先には行っていません。それどころか7世紀中ごろの『隋書』は、倭人は距離を里数で測れないので、日数で数えていると書いています。

そうすると「倭人伝」の疑問ですが、女王国の東の海を渡ると「また国有り、皆倭種なり」とも書いています。太陽で判断する方角は、当時の里で憶測する距離より正しいとみてよいでしょう。『後漢書』が奴国を「倭国の極南界」としたように、陳寿も伊都国の南に位置する邪馬台国を、さらに遠く延長して天命を受けた魏の天子の資質を誇張しようとしたのだろうと考えています。

それで私が注目したいのは、台湾の東西両岸を洗って北上する黒潮の分流です。大部分は九州西岸の沖合を通って壱岐、対馬へ向かいますが、その流れの西縁は朝鮮西海岸をゆるやかに北上する西朝鮮海流になります。もし舟が「会稽・東冶の東」を目指せば、台湾の北側で九州や朝鮮半島の西海岸へ向かう海流を推進力にすることができたはずです。




日本をとりまく海況と海流
（茂在寅男著「古代日本の航海術」小学館創造選書を参考に作図）

筑後川河口から望む有明海。
古来、中国・朝鮮半島交流拠点のひとつだった。

「魏志倭人伝」の卑弥呼が狗奴国と現実に相攻撃し合うと、魏は皇帝の詔書と旗を持った国境守備隊の属官を派遣し、倭の後ろ盾に魏があることを誇示しました。狗奴国の男王卑弥弓（ひみくこ）は、299年に国号を呉と定めて皇帝になった孫権が、建業（南京）に都を開いて任じた「王」だったのではないでしょうか。

呉皇帝に即位した孫権は、北方から魏に対抗するため、魏の遼東太守が帯方郡で勢力を拡大した公孫淵を「燕王」にして、高句麗とも友好・臣属の関係を成立させようとしていたのです。そのため魏は、高句麗を威圧して呉から離反させ、238年には帯方郡の公孫氏政権を滅亡させたのです。卑弥呼が魏の首都洛陽に朝貢使を派遣したのは、その翌年です。ところがその後、倭国の「親魏倭王」は、呉皇帝を後ろ盾にした狗奴国と相攻撃する関係になったと考えられます。そこで邪馬台国の所在地は、1万2千余里の距離を縮めて、対馬海流が北流する地域内で想定すべきだと考えています。

◎問い合わせ先
神埼市役所　政策推進室
☎37-0102